

途上国の人々の暮らしや環境をよくしたい さまざまな活動でNGOが貢献！

特定非営利活動法人 シャプラニール=市民による海外協力の会



URL ▶ <http://www.shaplaneer.org/>

国際協力の「遠い」を「近い」に



布に刺しゅうをするバングラデシュの女性。シャプラニールのフェアトレード活動「クラフトリンク」では、手工芸品の生産と販売活動を行う

対象に補習をするためのセンターを運営したり、生活向上のため、少女が知識を得て、主体性を発揮できる場となるようなグループ活動を支援したりしています。また、フェアトレード（※）活動「クラフトリンク」を通して、現地の人々が作った手工芸品をシャプラニールが発行するカタログや販売協力店などで購入することで、日本にしながら国際協力ができるようになっています。

シャプラニールとは、バングラデシュの言葉で「^{さいりん}睡蓮の家」という意味で、シャプラ（睡蓮）はバングラデシュの国花です。そのバングラデシュをはじめ、ネパール、インドなど、その日の食べ物を得るのに苦労する5億人とも言われる貧困人口を抱える南アジア地域が「シャプラニール=市民による海外協力の会」の活動地域となっています。シャプラニールは「援助をしない海外協力」を活動姿勢とし、資金や物を提供するだけの援助ではなく、現地で活動するNGOとの連携で行政などへの働きかけを行いながら、自分たちの力で自分たちの生活を向上していく過程の支援を1972年から続けています。

例えば、バングラデシュの地理的に隔絶された中州地帯（チョール）では、学校に通うことが困難な子どもたちを



バングラデシュにある、シャプラニールと現地NGOが運営するセンターで補習を受ける子どもたち。NGOや行政の支援が手薄な中州地帯には、学校に行けない子どもが多く住んでいる

※フェアトレード：途上国の商品を適正な価格で継続的に販売する取り組み。途上国の貧困解消や経済的な自立を目的としている。

【写真提供：(特活)シャプラニール=市民による海外協力の会】

財団法人 北九州国際技術協力協会 (KITA)



URL ▶ <http://www.kita.or.jp/>

環境と開発の調和をめざして

北九州国際技術協力協会 (KITA) は、1980年、地元経済団体を中心に北九州地域に蓄積された工業技術を開発途上国へ移転することを目的に発足。その後、「持続可能な発展」をテーマに活動を拡大し、途上国における技術協力、人材育成のための国際研修等を実施しています。研修内容は、主に水質汚染防止や廃棄物の管理といった環境対策や、省エネルギーやクリーナープロダクション (CP) (※) といった産業技術や環境対策に関する分野で実施され、これまでに138か国・6,200人超の研修生を受け入れています。

開発途上国の技術協力については、ベトナム・ハイフォン市で取り組んだ2007～2009年の地球環境基金の助成活動で、市の支援のもと、排水で河川を汚すおそれのあった工場にCPによる環境対策を導入しました。また、同市の住民を対象に環境啓発セミナーを開催し、北九



現地NGO、Uli Peduliが主催する環境キャンペーンで賞を受賞したコミュニティ（インドネシア・スマラン市）【写真提供：Uli Peduli】

※クリーナープロダクション：従来の公害対策である排出での汚染防止処理だけでなく、生産から廃棄、再利用にいたる全ての工程で環



現地での指導風景（ベトナム・ハイフォン市）

州市が公害を克服した取り組み等を紹介。地域での環境活動の実施に向けて働きかけを行いました。

インドネシア・スラバヤ市においては、生ごみの堆肥化（コンポストの活用）と資源ごみの分別収集による廃棄物の減量化を支援。行政機関、NGO、市民が協働してコンポストを普及させることにより、2004～2006年の3年間でごみ処理量の10%削減が達成されました。この成功例をインドネシア国内の他都市や、フィリピン・マレーシアなど他の東南アジア諸国へ展開するよう取り組んでいます。

「北九州市の市民・企業・行政が、これまで得てきた環境対策、廃棄物減量・リサイクルの技術や、産学官連携の取り組みの事例を協力先と共有し、ともに現地に合った手法を模索しながら、地球温暖化対策や循環型社会構築などに取り組んでいます」（人材育成担当課長・永石さん）

【写真提供：(財)北九州国際技術協力協会】

公益財団法人 オイスカ (OISCA)



URL ▶ <http://www.oisca.org/>

住民自らが環境保全に取り組んでいくために

アジア・太平洋地域を中心に27の国と地域で活動を行うNGO、オイスカ。1961年、貧困や飢餓に苦しむアジアの人々に目を向け、「FOOD FIRST」をスローガンに、途上国へ農業技術者を派遣したのが活動の始まりです。活動の中心は、農村開発支援、そして地域社会で農業を担う人材の育成です。また、活動の中で、森林減少による洪水や干ばつという問題に直面したことから、植林活動などの環境保全にも取り組んでいます。

1980年に植林活動を開始したタイ東北部は、かつて70%あった森林面積がわずか3%に減少してしまった地域。継続的なボランティア派遣に加え、住民たちに自然との共生を伝える人材育成を通して、住民自らが環境保全活動に取り組むよう力を入れました。

このような植林や人材育成のノウハウを、より地域に根づかせ、より広い



途上国の地域産業を支えるリーダーを育成する研修センターでの農業研修



「子供の森」では植林を通じて環境を学ぶ

世代を巻き込んだ活動へと発展させるため、1991年から「子供の森」計画が始まりました。子どもたちが学校などで苗木を植え、育てる体験を通して、将来にわたって自分たちのふるさとの自然を守っていく心と知識を身につけることを目的としています。こうした活動は、一部地域ではごみのリサイクルや有機農業の学習に発展しながら、現在、27か国4,410校の学校が参加するまでになりました。

「植林ボランティアの派遣なども含めた民間レベルの草の根レベルの国際協力を重ねることで、地域住民の環境への意識を少しずつ変えていくことができたと考えています。タイ・スリン県では今でも最初に植林を行った日が、「ラブ・グリーンデー」として県の大切な日となっています」（国際協力部・高田さん）

【写真提供：(公財)オイスカ】